

古今東西、睡眠中の脳内、つまり夢の中を蹂躪する空想上の怪物は数多い。西洋ではキリスト教で伝えられる悪魔の一族である「夢魔」。男はインキュバス、女はサキュバスと呼ばれ、それぞれ女、男を淫夢に導く。出自の宗教から、十字架に弱いのはお約束事だ。ハリウッドのスクリーンには、エルム街を徘徊する殺人鬼「フレディ」が登場する。彼に切り裂かれれば、悪夢から覚めても肉体に傷を負っているというから、恐怖は昼夜を問わず続くことになる。鳥山石燕や水木しげるによって描かれている、日本の妖怪「枕返し」は寝ている間に枕の場所を変えるという。いたずら好きでコミカルな印象である。こうした邪悪な面子が脳裏をよぎると、不安で眠れなくなるかもしれないが、そこは良くしたもので、同じ想像の産物として「獺（ばく）」という悪夢を食べてくれる霊獣も存在するからご安心を。

実は、最近ではIT技術で他人の夢の中味を垣間見ること、もはや絵空事では無くなってきた。fMRI（磁気共鳴機能画像法）を使って測定した脳波パターンと、被験者の見た夢のヒアリング結果とを比較し、その関係のデータベース化が進んでいるという。またBMI（Brain Machine Interface）という脳波を解析して電気信号として取り出す取り組みもある。これを使った機械やロボットの操作も研究されていて、米国では兵器の遠隔操縦の構想もあるようだ。

これらは脳を主体に見ればアウトプットであるが、逆方向のインプットはどうだろう？ 実際、こちらの技術も日進月歩だ。米軍ではマイクロ波を使い、耳ではなく直接脳内に音を発生させるその名も蛇女「MEDUSA」と呼ばれる兵器が、実用化されている。潜在意識に作用し相手の戦闘意欲を喪失させるといった使い方

が、想定されているという。

さらには電磁波によって人間に感染する、ある種のコンピュータウイルスが開発される可能性も、米国の研究者によって言及されている。発症すると脳内の記憶を次々と破壊するという。静電気も感染源となり得るらしいから、うかつに物にも触れられない。もっともノイマンアーキテクチャの脆弱性を突くコンピュータウイルスが、人間の脳を実行環境にする事ができるのかといった懐疑的な意見もある。どうも現実には殺伐で「夢のある話」ばかりとはいかないようだ。

ひょっとするとあなたが寝苦しいのは、熱帯夜のせいだけではないかも知れない。呼吸や脈拍、寝返りなどを計測し、睡眠状態を解析する健康家電なら容易に入手できるが、こうしたIT兵器が原因ならとてもではないが太刀打ちできない。脅威を撃退してくれる「獺」のようなアプライアンスの商品化を待つしかないだろう。

「獺」葛飾北斎・画（江戸時代）

